

国語教材としての「近世俳諧」

——文学史的指導上の問題点と「俳言」——

大久保 順 子

松尾芭蕉の俳諧は、近現代の国語教科書に採用される代表的な近世文学作品の一つである。先に考察^{〔1〕}を行ったとおり、俳諧紀行文『おくのほそ道』をはじめとする教材採用例の数は多く、作品研究の進展を背景として「古典的」に作品が存在し、現代にも影響を与え続ける有名な古文教材としてのイメージが強い。例えば、戦前に多かった近松門左衛門の浄瑠璃作品の教材採用数が戦後に減少する傾向^{〔2〕}と比べても、芭蕉は戦前戦後を通じて比較的コンスタントに国語教材に採用されているといえる。

だが『おくのほそ道』以外にも、俳諧や俳論の作品教材は存在し、教科書によって採録される作品やその扱われ方が異なる。特に近世の「俳諧」の作品に関する読解指導の方法や考え方は、その教材と指導者と学習者に関わる教育課程や社会状況等の変化、「俳諧」というジャンルの文学様式の位置づけ等、国語科教育における指導目標の設定そのものに関わる様々な問題を孕んでいる。

そこで本論では、中等教育の国語教科書における「近世俳諧」教材の「本文」の例に着目し、内容と扱い方の傾向や特徴について考え、その単元設定や教材構成から窺われる作品観や文学史観等に関連する問題点について、検

討を試みることにする。

一 中学・高校の国語教科書における「俳句」と「俳諧」

俳諧紀行文『おくのほそ道』の国語教科書教材と教育史的展開に関する調査研究としては、既に堀切実他編『おくのほそ道』と古典教育³⁾の詳細な成果がある。また、国語教育における「俳句」教材研究は、小中高の各課程で盛んに行われている。「俳句」教材といえ、今日では世界最小の短詩形 haiku として各国語で創作される文化現象を踏まえた国語科教材となっている。

主にイメージされる授業の姿は、近現代俳句作品の例から五・七・五を「鑑賞・実作して表現に親しむ」指導と学習活動であろう。例えば平成二十五年度版の中学三年生用の東京書籍『新編 新しい国語3』（平25・2、平23・2・28 文部科学省検定済）には「俳句五句」に近代俳句（虚子・草田男・子規・秋櫻子・山頭火）の鑑賞、続く「書く」教材に「俳句を作って句会を開こう」がある。その他、高校用の教材例では大修館書店『古典1 改訂版』（平23・4、平19・2・20 文部科学省検定済）や『古典B 改訂版』（平29・2・20 文部科学省検定済）の古文編「8 和歌・歌謡・俳諧」の連句「市中の巻」に、「学習のポイント」として「(2) 三人一組となり、次の条件を守って、秋の発句（五七五）、脇（七七）、第三（五七五）を作ってみよう。①各句に秋の季語を入れる。②三句がらみにならないよう、第三を転じる。」といった、「連句」「俳諧」の学習内容も加えられている。⁴⁾

「俳句」から「連句」までの教材を扱うこのような指導の「拡がり」は、（近代以降の「俳句」を主とする文学観に留まらない）今日の近世文学研究の成果に基づく「俳諧」観の視点が現在の教科書編集や教材採録にも反映されてきた動向と窺える。また、平成二十年代の学習指導要領改訂に伴う指導内容の「伝統的な言語文化に関する事項」の設定の影響も考えられる。「現代語による生徒の五七五の作句」に留まらず、学習内容に「俳諧」「連句」までが含まれる教材では、歴史的に有名な句の鑑賞や、基本的な文学史的背景の理解も必要になってくるはずである。実

際に句の教材を鑑賞し味わう単元の教材での「近世俳諧」と「近代俳句」、「俳諧」と「俳句」の扱われ方について、まずその例を確認する（※以下、本論中の本文引用箇所の傍線は、引用者が付すものとする）。

中学校の国語教科書の場合、例えば平成二十五年度版の光村国語『国語3』（平25・2・平23・2・28 文部科学省検定済）では「2 多様な視点から——豊かな言葉」に「俳句の可能性」（宇多喜代子）と飯田龍太・正岡子規・友岡子郷・加藤楸邨・種田山頭火の「俳句」が掲載され、続く「俳句十六句」では「近世の俳句」3句（芭蕉・蕪村・一茶）と「近代以降の俳句13句（鬼城・碧梧桐・虚子・放哉・秋櫻子・茅舎・多佳子・波郷・白泉・鬼太・深見けん二・鷹羽狩行・正木ゆう子）がそれぞれ掲載される形となる（なお、光村『国語3』平成十九年版では「近世の俳句」4句と「近代の俳句」12句であった⁽⁵⁾）。さらに、同教科書の「4 古典を楽しむ」（二十五年度版は「5 いにしえの心を語らう」）には「夏草——おくのほそ道——」が構成されている。

この他、教育出版『伝え合う言葉 中学国語3』（平25・1・20）の「近代の俳句」では近代俳句14句を採録する。三省堂『中学生の国語 三年』（平25・2・20 第二版）「俳句の世界」は一茶1句と近代俳句14句の計15句を掲載、解説「俳句を味わうために」の例句8句のうち1句めが与謝蕪村で、近代俳句と近世俳諧を区別せず併せて掲げている⁽⁶⁾。

中学の国語教材では主に「俳句」の用語が用いられている。三省堂の例が近世と近代の句を共に「俳句」の概念で扱う教材であるのに対し、前述の光村『国語3』の方は「俳句」の中で「近世俳諧」と「近代俳句」を分ける教材構成の意識が働いているとみられる。さらに光村『国語3』「夏草——おくのほそ道——」の「俳句と俳諧」解説には、「俳諧」の定義が以下のように説かれている。

「俳句」は、江戸時代には「発句」とよばれた。それは、五・七・五の長句と七・七の短句とを交互に連ねて作る「俳諧の連歌」の最初の一句のことであった。「俳諧」とは本来「滑稽」という意味であるが、「俳諧の連歌」を略した言葉としても用いられる。

発句は、参加する人たちに最初に示す作品なので、そこにはあいさつをする気持ちがあり、その時々々の季節

を表す言葉が入れられたといわれる。その伝統は、季語として俳句にも受け継がれている。

俳諧に参加する人は、前の句にうまくつながるように工夫しながら次の句を付け足していき、発句に始まる世界が、どのように変化し、展開していくかを、互いに楽しんだのである。そこには人と人との豊かなコミュニケーションの場が作られていた。芭蕉の旅も、各地の人々と俳諧を作り合い、交流を深める旅であった。

俳諧は「連句」ともよばれ、今日、複数の作者で作る珍しい詩の形式として、海外からも注目されている。

(「俳句と俳諧」)

この文章は「蕉風の連句俳諧」の概念に基づく「連句の発句」の説明として妥当であり、(近代俳句と異なる)「近世俳諧の発句」の文学史的な解説であるといえる。ただし、この教科書には『おくのほそ道』の各段の発句や「俳句十六句」の五七五の「俳句」が掲載されているものの、「連句」作品そのものは掲載されていない。中学三年生が「連句」のイメージを想像し理解するには、別途に連句の作品例の資料を示す必要がある。また、「季語(その時々)の季節を表す言葉」の発想は解説されているが、「俳諧」という用語の「本来「滑稽」という意味である」「俳諧の連歌」を略した言葉」の説明は、文学史的な「連歌」理解の前提がなければ難解である。その点の不明な学習者が、近世俳諧と近代俳句の違いを「五・七・五の同詩形の単なる成立時期の差」のように思い誤る恐れがある。

近世文学研究者がこの違いを説明するならば、近世の俳諧観の基本的な考え方の一つをここに補うであろう。それは、芭蕉以前の初期俳諧から意識された、伝統的雅文芸と「俳諧」との使用言語感覚の根本的な違い——言わば、「歌語」に対する「俳言」の考え方である。

高等学校の古文教科書には、この「俳諧」を構成する言語の中の「俳言」の使用について、解説しているものが幾つかある。以下にその例を示す。

(1)俳諧とは本来滑稽を意味する語である。和歌的で優美な連歌に対して、機知に富んだ滑稽さを特色とする連歌を俳諧連歌といったが、この俳諧連歌を略して俳諧と呼ぶようになった。俳諧は庶民の間で広く行われるよう

になり、やがて松永貞徳によってきまりが整えられた。現在はこれを連句と呼んでいる。俳諧は、俗語や漢語といった、伝統的な和歌の世界では用いられなかった言葉(俳言)を取り込み、新しい領域を拓いた。(第一学習社『高等学校標準古典』平19・2、「俳諧 春夏秋冬」「俳句と俳諧」)

(2)連句の特性 俳諧では、口語・漢語・俗語等の日常語(俳言)を句に読み込むことが主張された。そのため、伝統的雅語を用いる和歌・連歌より、日常生活が自由に表現された。また、発想の異なる複数の人間が、共通の場(座)で鑑賞と創作に従事するので、人々が談笑するかのような、その場の雰囲気に応じた即興性が特に重視された。(大修館書店『古文1 改訂版』平23・4「俳諧・浮世草子」「連句について」解説。大修館書店『古文B 改訂版』(平29・2文部科学省検定済)に同文掲載有)

これら(1)(2)の解説は、学習者や指導者が「俳諧」の句の本来の性質を把握し理解するのに必要な事項を示しており、(近代俳句と比べる以前に)俳諧の発句の五・七・五が、古典和歌一首三十一文字の上句の五七五とも質的に違うものであることを示唆している。この理解には、『古今和歌集』『新古今和歌集』等の単元の和歌の作品の学習の際、生活の日常的な語彙ではない「歌語」の表現を認識することが前提となる。「非和歌的」言語が「古典的文学」の正統の表現ではない「はずれたもの」、非調和的なもの、「滑稽」なものとなり、「俳諧」となるという考え方に、それはつながるからである。少なくとも、近世初期から芭蕉に至る「俳諧」は、元々そうした伝統に対する「新奇な」文学の性質を指していた。

前掲の『国語3』『俳句と俳諧』解説の前提もそこにあり、現代の生徒たちにとつての「和歌と俳諧の違い」の解りにくさは、俳諧のこの「和歌と比べての新しさ」のニュアンスの不足によるのではないかと考える。中学生が「古典に親しむ」単元で本当に「俳諧」の感覚を味わうためには、この「伝統的な和歌の世界では用いられなかった言葉とは何か」の理解が必要となる。それは、古典和歌文学の学習から続く内容でもある。

文学史上では確かに、蕉風俳諧の「俗語を正す」俳言の「風雅」化によって、「俳言」は当初の滑稽・猥雑なものから「俗の詩精神」へ昇華したと評価されており、それは後代の俳諧、ひいては近代俳句の文学性にも影響を与え

ることになる。そして、蕉風俳諧以降の発句と近代俳句を「文学的」な五七五の「俳句」作品教材とする現行の教科書の考え方にも、それがつながっていると考えられる。だが、連句俳諧研究の成果を生かすことよって、日本の韻文学史上の「俳言」の意識から俳諧の「俳句」鑑賞の方法の捉え直しが可能である。そもそも俳諧は、和歌から離れようとする「俳言」の表現の意識によつて、古典的文学様式における言語使用の規範意識から逸脱するエネルギーを得、変化と不易を目指す文学であった。俳諧の作品は、その文化現象のダイナミックな働きを学べる興味深い「知」の教材なのである。

二 「近世俳諧」発句作品の教材化の傾向

今日の国語教科書で実際に採用されている「近世俳諧」作品教材において、「俳諧」の発句はどのように扱われているのかを検証する。以下、平成以降の高等学校用の古文の教科書の例を幾つか掲げ、掲載句と、教材の示唆する指導の要点のヒントとみられる「学習の手引き」に相当する箇所、それぞれの内容について考察したい。⁷⁾

【例1】明治書院

①『精選 国語Ⅱ 二訂版』（17明治国Ⅱ142）（市古貞次・長谷川泉・築島裕他編、平4・1・20、昭57・3・31文部省検定済、平3・3・31改訂検定済）「俳諧と浮世草子」の「俳諧（十四句）」

・松尾芭蕉8句（あけぼのや・花の雲・うきわれを・菊の香・芭蕉野分して・塩鯛の・いざさらば・旅に病んで）、
与謝蕪村6句（春の海・白梅や・さみだれや・愁ひつつ・月天心・鳥羽殿へ）

・（研究A）「一、それぞれの句について、主としてどのような感覚が生かされているか、考えてみよう。」「二、それぞれの句を次の(1)～(4)に分けてみよう。

- (1) 近世の庶民生活がよくうかがわれる句。
- (2) 歴史的な背景を持つ句。
- (3) 主情的な句。

(4) 叙景的な句。「三、芭蕉と蕪村の句には、それぞれのような特質が認められるか、話し合ってみよう。」

(研究B) 「一、それぞれの句の切れ字の働きを調べてみよう。」 「二、字余りの句はどれか。またそれはどのような効果をもたらしているか、考えてみよう。」

芭蕉・蕪村の発句を選んだ構成である。研究Bでは切れ字や字余り等の句形について、研究Aでは句意についての考察が設定されている。そのうち、研究Aの二(1)「近世の庶民生活がよくうかがわれる句」という問いかけは、俗語の「俳」の性質と関連させて考えることができる。

②『精選 古典Ⅰ 古文編』(117明治古Ⅰ506) (築島裕・久保田淳・竹田晃他10名編、平9・1・20三版、平6・3・15文部省検定済) 俳諧と浮世草子「俳諧」(22句)

・芭蕉8句(ほろほろと・蛸壺や・うき我を・芭蕉野分して・この道や・海暮れて・塩鯛の・旅に病んで)・蕪村8句(白梅や・ゆく春や・牡丹散つて・愁ひつつ・鳥羽殿へ・月天心・蕭条として・斧入れて)・一茶6句(雪とけて・蟻の道・涼風の・有明や・さびしさに・心から)

芭蕉・蕪村・一茶の発句による構成は『基本国語一 最新版』(平成四年度版見本、昭63・3・31文部省検定済、平3・3・31改訂検定済)「十四 俳諧と浮世草子」の「菊の香(俳句十八句)」から続いている。①と同様に(研究A)で句の表現、(研究B)で表現技法を問う手引きがあるが、(研究B)の「三(a)擬態語を用いた句、(b)音便形の語を用いた句、(c)漢語調の語を用いた句を指摘し、それぞれ、一句にどのような印象を与えているか、話し合ってみよう。」は「俳諧」の「俳言」の性質に関する問いかけにつながる内容でもある。

③『精選 新国語Ⅱ 古典編』(117明治国Ⅱ542) (紅野敏郎・築島裕・久保田淳他31名編、平9・1・20三版、平6・1・31文部省検定済) (古文編) 四俳諧と浮世草子 俳諧(十七句)

・芭蕉6句(梅が香に・若葉して・芭蕉野分して・この道や・海暮れて・旅に病んで)・蕪村6句(ゆく春や・牡丹散つて・愁ひつつ・月天心・蕭条として・白梅に)・一茶5句(めでたさも・涼風の・蟻の道・さびしさに・

心から)

芭蕉・蕪村・一茶の句から選んでおり、②と同様に(研究A)で句の内容、(研究B)で表現を問う。研究B「二」に、②の「三(a)擬態語を用いた句、(b)音便形の語を用いた句、(c)漢語調の語を用いた句」と同じ問いが置かれている。

④『新編国語総合』(117明治国総013)(久保田淳・中村明・中島国彦他33名編、発行年月なし見本、平14・2・10検定済)(古文編)4古典の調べ「古典の調べ——和歌と俳諧」

・芭蕉1句(五月雨を)・蕪村1句(菜の花や)・一茶1句(名月を)

万葉ノ新古今の和歌16首と、各俳人一句ずつの俳諧の発句3句を合わせた、高校一年「国語総合」科目用の教材構成となっている。「学習の手引き」1・2は和歌と俳諧の朗読と内容の把握、3は「現代短歌や俳句と読み比べ」、4は感想、5は本歌取りなど和歌修辞等の学習を行うものである。「言葉の学習」では季語、切れ字、助動詞の学習を示唆する。なお、和歌と俳諧の違いの解説等は本文に掲載されていない。

⑤『精選古典』(117明治古典015)(久保田淳・丸山松幸他編、平16・1・20、平15・3・20検定済)(前編 古文編)8俳諧と俳論「俳諧」(松尾芭蕉・与謝蕪村・小林一茶)

・芭蕉8句(ほろほろと・梅が香に・若葉して・おもしろうて・芭蕉野分して・病雁の・海くれて・旅に病んで)・蕪村7句(行く春や・牡丹散つて・愁ひつつ・鳥羽殿へ・月天心・斧入れて・白梅)・一茶5句(雪とけて・涼風の・有明や・心から・これがまあ)

《研究》「一」「ほろほろと」「行く春や」「雪とけて」の句で、それぞれの季節感のとらえ方にはどのような特徴があるか、考えてみよう。「二」辞世の句とされる松尾芭蕉の「旅に病んで」の句と、与謝蕪村の「白梅」の句を比較して、受ける印象の違いについて、話し合ってみよう。「三」「おもしろうて」「愁ひつつ」の句で、それぞれ「やがて悲しき」と感じたり、「愁ひ」を抱いているのは、どのようなことに対してか、考えてみよう。「四」涼風の「心から」「これがまあ」の句には、自分の人生に関するどのような思いが詠まれているか、話し合ってみよう。」

《言葉の学習》一 それぞれの句の季語と季節、切れ字を指摘し、その表現上の効果について考えてみよう。二
(a)擬態語を用いた句、(b)漢語を用いた句を指摘し、それぞれの句にどのような印象を与えているか、話し合ってみよう。

⑥『新精選古典』(117明治古典⁰³⁷) (久保田淳・丸山松幸他編、平22・1・20三版、平19・2・20検定済) 前編古文編「10俳諧・俳論」の「俳諧」に、芭蕉8句(⑤同)・蕪村7句(⑤同)・一茶5句(⑤同)を掲載。「研究」は⑤の一・二・四と同じ(三はない)。「言葉の学習」は⑤と同文である。

⑦『高校生の古典』(117明治 古典⁰³⁸) (久保田淳・丸山松幸他編、平22・1・20三版、平19・2・20検定済) 前編古文編「八 此木戸や(俳諧・俳論)」の「俳諧」

〔春4句〕花よりも(貞徳)、山路来て(芭蕉)、春の海(蕪村)、雪とけて(一茶)

〔夏4句〕若葉して(芭蕉)、目には青葉(素堂)、市中は(凡兆)、五月雨や(蕪村)

〔秋4句〕この道や(芭蕉)、朝顔に(千代女)、月天心(蕪村)、有明や(一茶)

〔冬4句〕大晦日(西鶴)、旅に病んで(芭蕉)、凧の(言水)、斧入れて(蕪村)

《学習》〔1〕「若葉して」「朝顔に」の句を読み、作者の気持ちはどのように表されているか、まとめてみよう。

〔2〕「花よりも」「大晦日」の句を読み、それぞれの「おもしろさ」について説明してみよう。〔3〕「春の海」

「五月雨や」「この道や」「凧の」の句は、季節の情感をどのように表しているか、話し合ってみよう。〔4〕

気に入った句を一つ挙げ、感想を発表してみよう。

《言葉の学習》〔1〕各句の季語と切れ字を指摘し、それぞれどのような表現効果を上げているか、考えてみよう。

⑤⑥は②以降続く芭蕉・蕪村・一茶の発句の構成による教材であり、⑤や⑥の「言葉の学習」の(a)擬態語や(b)漢語等の使用語句の問題は「俳言」と関連させることができると思われる。一方、⑦は近世俳諧の貞徳・一茶の各句と芭蕉・蕪村・一茶の句を四季別に収めるという、全く異なった構成をもつ。《学習》《言葉の学習》は句の「それぞれのおもしろさ」「季節の情感」「切れ字」などを主に問うものだが、この⑦「俳諧」の冒頭の解説文「動乱の中

世から近世になって、庶民も文学を制作したり、愛好したりするようになる。近世の人々の中で俳諧が根付き、多くの民衆俳人を生み出した。近世の俳諧には、必ず季節感を表す言葉である季語が詠み込まれる。」は、俳諧の「俗」の特質を考えるヒントに用いることができる。

【例2】大修館書店

①『高等学校 国語Ⅱ』（50大修館国Ⅱ537）（平岡敏夫・北原康雄・田口和夫・田部井文雄編、発行年月なし見本、平6・1・30文部省検定済）古文編「四 俳諧・浮世草子」の「俳諧（芭蕉 蕪村 一茶）」

・芭蕉8句（枯れ枝に・海暮れて・山路来て・おもしろうて・蛸壺や・病雁の・この道や・旅に病んで）、蕪村5句（鳥羽殿へ・五月雨や・行く春や・月天心・びいどろの）、一茶5句（古郷や・これがまあ・雪とけて・いうぜんと・露の世は）

（学習の手引き）「1「古典を読むために6」（※）を参考にして、そのほかの句の季語とその季節、切れ字を指摘してみよう。」「2芭蕉、蕪村、一茶の句の特色を比較してみよう。」

※「古典を読むために6 切れ字と季語」俳諧という文芸は、五・七・五の十七音からなる発句に続いて、多くの句がよみ継がれるのがふつうである。発句は、その連なる句の最初にあつて、全体の雰囲気我代表する感じがなければならず、他の句とは異なる独立した趣が求められる。そのため、発句では切れ字を用いてはつきり言い切った形を取ることが必要であるとされている。（中略）発句にはまた、特定の季節を表す語である季語を必ずよみ込まなければならぬという約束ごとがある。（中略）この発句は、それ自体独立してよまれるようにもなり、発句のみで鑑賞される機会も多かった。

近世俳諧の芭蕉・蕪村・一茶の発句による教材構成である点は【例1】明治書院の②③⑥と同様である。一方、解説は「発句」の意味を連句のルールから解説し、切れ字と季語の必要性を説く。連句俳諧の概念に基づく解説であるが、連句作品例が掲載されないため「多くの句がよみ継がれる」イメージが捉えられにくいのではないか。また、

俳諧の「俗」や庶民性といった観点については特に説明に含まれていない。

② 『高等学校国語Ⅱ改訂版』(50大修館国Ⅱ597) (平岡敏夫・北原康雄・田口和夫・田部井文雄編、平11・4・1、平10・2・28・文部省検定済) (古文編) 四俳諧・浮世草子俳諧(芭蕉・蕪村・一茶) ※本文、学習の手引きともに①と同文。

③ 『高等学校国語Ⅱ改訂版』(50大修館国Ⅱ598) (平岡敏夫・北原康雄・田口和夫・田部井文雄他26名編、平14・4・1四版、平10・2・28文部省検定済) (古文編) 三 近世の文学「俳諧(芭蕉・蕪村・一茶)」

・芭蕉7句(芭蕉野分して・あけぼのや・冬の日や・閑かさや・梅が香に・秋深き・旅に病んで)・蕪村6句(風・春雨や・ゆく春や・五月雨や・稲妻や・鳥羽殿へ)・一茶4句(いうぜんと・蟻の道・涼風や・これがまあ) ③は①②と異なった選句である。「学習の手引き」(1それぞれの句の季語とその季節、2それぞれの句の情景・心情をもとに、各俳人の作風を比較)は、①の「学習の手引き」の趣旨と共通する。

④ 『高等学校 古典Ⅰ』(50大修館 古Ⅰ557) (平岡敏夫・北原康雄・田口和夫・田部井文雄他26名編、平14・4・1四版、平10・3・15文部科学省検定済) (古文編) 七俳諧・浮世草子「俳諧」

・芭蕉8句(枯れ枝に・海暮れて・山路来て・おもしろうて・蛸壺や・病雁の・この道や・旅に病んで)・蕪村4句(鳥羽殿へ・五月雨や・月天心・びいどろの)・一茶4句(古郷や・これがまあ・いうぜんと・露の世は) (学習の手引き) 「1それぞれの句の季語とその季節、切れ字を指摘してみよう。2芭蕉、蕪村、一茶の句の特色を比較してみよう。」

芭蕉の8句は①と同じ選句で、蕪村と一茶の句数が①より減少している。学習の手引きの趣旨は①③と共通する。

⑤ 『新編 国語総合』(50大修館 国総011) (北原保雄監修(代表著作者)、発行年月なし見本、平14・2・10文部科学省検定済) (古文編) 4和歌と俳諧の調べ「俳諧(芭蕉・蕪村・一茶)」

・芭蕉3句(野ざらしを・荒海や・旅に病んで)・蕪村3句(ゆく春や・月天心・蕭条として)・一茶3句(めでたさも・やせ蛙・これがまあ)

※(学習のポイント)「1それぞれの句の季語と季節、句切れについて、調べてみよう。2印象に残った句を選んで、その句の情景を、文章や絵で表現してみよう。」

高校一年「国語総合」科目用の教科書教材である。作者別に各3句ずつに句数が絞られ、作品を鑑賞して親しみ、かつ表現する学習活動が示唆される。手引きの要点は①～④とほぼ同じとみられる。

⑥『精選古典』(50大修館古典013)(北原保雄監修(代表著作者)、平19・4・1、平15・3・20文部科学省検定済)(古文編) I 七俳諧・浮世草子「俳諧(芭蕉・蕪村・一茶)」

・芭蕉8句・蕪村4句・一茶4句の選句と本文は④と同じ。

・「学習の手引き」は④と同文の1と2に加え、⑤の2と同文の「3好きな句を選んで、その情景を絵や文章で表現してみよう」の3つから成っている。

⑦『古典1 改訂版』(50大修館古典033)(北原保雄監修(代表著作者)平23・4・1、平19・2・20文部科学省検定済) 古文編「九 俳諧・浮世草子」の「俳諧(芭蕉 蕪村 一茶)」「連句について」「市中の巻」

・「俳諧」(芭蕉8句・蕪村4句・一茶4句と学習の手引きは⑥と全て同文)、解説文「連句について」(前掲)、「市中の巻」(『猿蓑』より初表6句と前掲の学習の手引き)から成る。

発句と連句の作品を共に採用し、「俳諧」(発句)の解釈では従来通り季語・句切れ・句意の考察を行う。「連句」では前句と付句の「付け」に注意した鑑賞方法を示唆し、秋の三つ物(発句・脇・第三)の創作も試みさせる。この「俳諧」教材に向井去来『去来抄』「此木戸や」と井原西鶴の浮世草子『西鶴諸国はなし』「大晦日は合はぬ算用」を組み合わせて、「九」全体で「俳諧と浮世草子」を学習する単元構成となっている。

⑧『古典B 改訂版 古文編』(50大修館古B 339)(北原保雄監修、発行年月なし見本、平29・2・28文部科学省検定済) 第一部8和歌・歌謡・俳諧「芭蕉・蕪村・一茶」「市中の巻」

⑨『精選古典B 改訂版』(50大修館古B 341)(北原保雄監修、発行年月なし見本、平29・2・28文部科学省検定済) 古文編 I 8和歌・歌謡・俳諧「芭蕉・蕪村・一茶」

⑩『新編 古典B改訂版』(50大修館古B342)(発行年月なし見本、平29・2・28文部科学省検定済) 古文編II 6
自然と人生——俳諧「俳諧への招待」「発句でたどる『奥の細道』」

平成29年度分の⑧⑨は前掲⑦『古典1改訂版』の内容を踏襲しつつ、新学習指導要領の指導課程の「古典B」に対応させた教科書とみられる。⑧と⑨の俳諧(発句)掲載の芭蕉8句・蕪村4句・一茶4句、学習のポイントは⑥⑦と同文である。⑩は『奥の細道』の発句9句(行く春や・かさねとは・世の人の・松島や・夏草や・五月雨の・象潟や・一家に・蛤の)のみを扱う新しい構成の教材である。

⑧は⑦と同様に発句と連句を両方扱うため、解説「連句について」をもつ。ただし、⑧の「連句の歴史」は⑦と同じ記述だが、⑦にあった約3ページ分の解説「連句の特性」「連句の規則」については、大きく省略され1ページ分となっている。

※例⑦「また、発想の異なる複数の人間が、共通の場(座)で鑑賞と創作に従事するので、人々が談笑するかのような、その場の雰囲気に応じた即興性が特に重視された。」

↓⑧また、その場の雰囲気に応じた即興性が重視された。(「連句の特性」)

⑦西鶴「大句数」四句の例↓⑧(該当箇所なし)

なお⑧⑨はともに、第I部に韻文作品、第II部に散文作品となるように、それぞれ単元を分けた構成をとっている。そのため、⑦の「俳諧と浮世草子」の「大晦日は合はぬ算用」は、⑧⑨ではそれぞれ第II部の近世の散文作品の枠となり、韻文の「俳諧」とは切り離れた位置に構成される。

⑧ 第II部 9 物語(三) 古事記(海幸山幸) 西鶴諸国ばなし(大晦日は合はぬ算用) 雨月物語(浅茅が宿)

⑨ 第II部 7 近世の小説・浄瑠璃 西鶴諸国ばなし(大晦日は合はぬ算用) 雨月物語(夢応の鯉魚)

曾根崎心中(道行)

このような改訂によって、読み手が教材構成から受ける作品の印象が質的に変化し、⑦にあった「俳諧と浮世草子」の単元の概念そのものも⑧⑨では薄まったと感じられる。

【例3】第一学習社

① 『高等学校 国語一』(183第一 国I 526) (稲賀敬二・市川孝・竹盛天雄他26名編、平7・2・10、平5・2・28 文部省検定済) 古文編和歌と俳句「花鳥風月」(各2首2句ずつ)

・花 君ならで(紀友則)・梅一輪(風雪)、見る人も(伊勢)・人恋し(白雄)、
・鳥 昔思ふ(俊成)・ほととぎす(蕪村)、ぬばたまの(赤人)・月や霞(秋成)

・風 吹く風の(実朝)、涼風の(二茶)、采女の袖(志貴皇子)、ひうひうと(鬼貫)

・月 何事も(西行)・蛸壺や(芭蕉)、志賀の浦や(家隆)・冬木立(几董)

和歌と俳諧を組み合わせた教材である。「学習」には「1それぞれの句切れやリズムに注意した朗読」に続き、関連して「3古歌や漢詩をふまえた和歌と俳句」の効果の考察、好きな作品を選んでの感想文作成、好きなテーマによる短歌・俳句の創作など、発展的な学習のあり方が示唆されている。その中において、「花」「鳥」は梅・桜・ほととぎす・千鳥の歌一首と句一句が並ぶ配置で、「2同じ題材を扱った和歌と俳句」のそれぞれの「情景や心情」を考える学習は、「和歌」と「俳諧」の違いを考えるのに有効な課題になりうるとみられる。

② 『高等学校 標準古典』(183第一 古典023) (稲賀敬二・森野繁夫他編、平19・2・10、平15・3・20 検定済) 第二章 俳諧「春夏秋冬」、コラム「俳諧と発句」

・貞門・談林4句 〓 雪月花(貞徳)・年の内へ(季吟)・海は少し(宗因)・浮き世の月(西鶴)、〔蕉門6句〕
〓 奈良七重(芭蕉)・応々と(去来)・梅一輪(嵐雪)・卯の花に(許六)・大原や(丈草)・上行くと(凡兆)、
〔芭蕉以降6句〕 〓 夕顔や(千代女)・初恋や(炭太祇)・愁ひつつ(蕪村)・月や霞(秋成)・青海苔や(几董)・
仰のけに(二茶)

・学習 〓 それぞれの句について、どのような情景や心情が表現されているかを考え、その情景や心情を味わってみよう。 〓 それぞれの句の季語を抜き出して、季語の役割について整理してみよう。 〓 で抜き出した季語から好きなものを選び、俳句を作ってみよう。 〓 四十六人の俳人の活動時期を調べてみよう。

近世俳諧の貞門・談林から蕉風以降の発句を、俳人一人につき一句ずつ集めた構成に、前掲の「俳諧と発句」解説を加えている。「学習」では句意、情景や心情、季語の役割、俳人の文学史的な把握から、季語を用いた「俳句」実作までを学習活動として示唆している。

③『高等学校 古典古文編』(183 第一 古典 021) (稲賀敬二 森野繁夫 他編、平 19・2・10、平 15・3・20 検定済) 第一章 和歌・俳諧「春夏秋冬」に掲載の発句 16 句と「学習」の手引きは②と同じである。ただし「和歌・俳諧」の韻文作品が単元にまとめられ、「俳諧と発句」の独立したコラムは③には掲載されていない。

これらの古文教材の【1】【2】【3】の例を俯瞰すると、「近世俳諧」の教材構成には、概ね

A 蕉風以降の俳諧(芭蕉・蕪村・一茶の句を中心として)

B 近世初期から後期に至る俳諧(松永貞徳・小林一茶)

C 蕉風の連句俳諧(『猿蓑』等)

の傾向性が認められる。Cの連句俳諧は、平成初年度以降の古文教科書で教材化が進んだ、前述のとおり比較的新しい傾向の教材であり、扱う教科書は必ずしも多くはない。そのCにおいても、俳諧文芸史の定義よりも、国語表層的ワークを視野に入れた「連句文芸」に力点が置かれている傾向がみられる。それに対し、Aの蕉風以降の代表的三俳人の発句教材は『国語総合』を含む古文教材で最も多くみられる構成で、蕉風以降の俳諧の定義に基づく「風雅」の発句を扱うものであり、前述の中学国語の例のように近代俳句と並ぶ五七五の俳句として扱われることもある。そして読解上、蕉風前後の「近世俳諧」の文学史的理解を最も要するとみられるものがBであろう。この考え方に基づき、その他の古文教科書の教材例を照らしてみる。

【例 4】A: 右文書院『新国語Ⅱ』(142 右文 国Ⅱ 602) (助川徳是・高橋和夫・田島毓堂・中村幸弘編、平 11・4・1、平 10・2・28 文部省検定済) 古文編「4 和歌・歌謡・俳諧」の「俳諧〔発句〕」(10 句)

・鯉売り(芭蕉)・越後屋に(其角)・梅一輪(風雪)・こがらしの(去来)・朝顔に(千代女)・盗人に(炭太祇)・春の海(蕪村)・うぐひすや(暁台)・絵草紙に(几董)・しづかさや(一茶)
・(学習の手引き)「1 次の各項について、それぞれ説明せよ。(1)「梅一輪…」の句の、「一りんほどの」を「一りんづつ」とするのは誤りとされるが、「ほど」と「づつ」とではどう違うか。(2)「こがらしの…」の句の初案は、「地まで落とさぬ」とあったのを、芭蕉の教示で直したと『去来抄』にある。「地にも」と「地まで」とではどう違うか。

近世俳諧のうち、蕉風以降の江戸後期までの俳人の発句を一句ずつ集めた構成であり、初期俳諧を含まない点でAの傾向とみられる。(学習の手引き)は、句を構成する語句の微妙な違いからそれぞれの表現の意図を考えさせるもので、基本的な俳句の鑑賞力が要求される設問となっている。

【例5】 A+C: 桐原書店『高等学校 古典(古文編)』(212 桐原 古典024) (中野幸一他編、平19・2・25、平15・3・20 検定済) I部「5 和歌と俳諧」の「俳諧 発句 連句」

・「発句」芭蕉5句(鶯や・蝸壺や・病雁の・初しぐれ・海暮れて)、蕪村6句(しら梅に・夏河を・御手討の・方百里・愁ひつつ・鳥羽殿へ)、一茶5句(目出度さも・わんぱくや・是がまあ・づぶ濡れの)

・「連句」『夏の月の巻』(『猿蓑』「市中は…」) 初表6句、名残裏6句

〔学習の手引き〕(発句)「読解1」すべての句について、季語・句切れを指摘してみよう。/ 2 芭蕉・蕪村・一茶の句を比較して、個性の違いについて話し合ってみよう。「発展3 芭蕉・蕪村・一茶の句の中でそれぞれ一番好きな句を選び出してみよう。また、ほかにもっと好きな句がないか、それぞれの句集を探してみよう。」(連句)「読解1」連句は前の句に付けて、そのもう一つ前の句から離れるのが原則である。それぞれの句について、付き方・離れ方を検討してみよう。

近世俳諧のうち芭蕉・蕪村・一茶の「発句」と、蕉風『猿蓑』の連句を掲載し、発句では句形や季語・句切れ、

連句では付けの具合の吟味を学習の手引きに掲げている。

また、この「俳諧 発句 連句」は「和歌と俳諧」の單元の中の、古今集〜続後撰集の和歌19首に続く「俳諧」16+12句として構成されているため、「和歌」と「俳諧」の違いの比較も指導で工夫できるとみられる。

【例6】 B:三省堂①『高等学校 古典I 古文編』(15三省堂古I555) (柴田武他、平11・3・30、平10・3・15
文部省検定済)「八 俳文・俳句」の「近世俳句」、②『高等学校 古典 古文編』(15三省堂 古典005) (平19・3・30
第四版、平15・3・20検定済) (15句) ※①②とも教材本文は同じ。

霞さへ(貞徳)・世の中や(宗因)・行水も(来山)・風の(言水)・海くれて(芭蕉)・古池や(芭蕉)・梅が香
に(芭蕉)・越後屋に(其角)・うめ一輪(風雪)・応々と(去来)・凧(蕪村)・牡丹散りて(蕪村)・五月雨や
(蕪村)・瘦蛙(一茶)・名月を(一茶)

(課題) ①「二 各句の季語を指摘して、季節の持つ効果について考えてみよう。」②「自分の好きな句を選ん
で、どのような情景や心情が詠まれているか、説明してみよう。」③「季語や表現の特色に留意して、俳句を
作ってみよう。」※②の「学習の手引き」には①の「二」「三」のみある。

貞門・談林から蕉風以降の各俳人各1句ずつを集めた教材である。近世俳諧の初期から後期まで、芭蕉・蕪村・一
茶の複数の句数に比重を置いている点では、Aの傾向も窺える。①の「課題」では季語や句意の考察、最後に俳
句の実作を促す問いかけが構成されている。

三 「俳諧」教材の意義とジャンル意識の変遷——今後の課題

平成以降の国語教科書の近世俳諧の教材採用例をみるに、有名な句は「定番」的に各社教科書で頻繁に採用され
る。教材の性質を前述のA・B・Cで考えた場合、全般的にはAに見るように、蕉風以降の俳人や芭蕉・蕪村・一

茶から近代俳句への展開を視野に入れ、五七五の季語や景物と句構成を味わうもの、すなわち「俗語を正」した後
の「風雅」の俳言による「俳句」の教材が主流である、という実情が窺える。今日の中高等教育の国語科指導におい
ては何よりも、現代文と古文とともに基本となる「俳句」の文学様式の理解が第一に目されているとみられる。

だが一方で、Bのように近世初期の発句から果敢に採り上げる教材の句の解釈では特に、季語や情景を考えるだ
けではなく、発句のもつ本来の「俳諧」の発想、「非和歌的なもの」「滑稽」「漢語的」「機智的」等の表現を感知す
る必要があるのではないか。それはまさに俳諧の作者の狙った「俳言」の観点が関わる部分である。前掲【例1】
①②の学習の手引きにみるような「近世の庶民生活がよくうかがわれる句」「擬態語を用いた句」「漢語を用いた句」
の意味を「俳言」につながるものとして指導者が理解し、発問も工夫できると考える。

教科書の「俳諧」としての発句」の解説が掲載されているのを「参照とする情報」として見る程度では、「俳諧」
の意味は学習者に感覚として伝わらず、生徒の思考が深まらずに終わってしまう恐れがある。中学や高校の国語科
授業の限られた時間数の中で「近世俳諧」の文学史的解説の時間をかけることは難しそうだが、それは本来、中世
以前の文学史を前提に理解されるべき「おくのほそ道」の指導にも共通して必要なことである。Bのような教材の
場合、【例3】②③「春夏秋冬」の句では、次のような「俳言」が指摘できる。

(例) 雪月花一度に見する卯木かな 松永貞徳 ※漢語「雪月花」 卯月の掛詞

仰のけに落ちて鳴きけり秋の蝉 小林一茶 ※「仰のけ」擬人法的な視点

先の単元で学ぶ『古今和歌集』の春部や秋部の歌の「卯の花」や「秋」の詠み方とどう共通し、どう違うか、といっ
た発問でもよく、洒落や機智的な面白さについての一言の示唆でもよい。「和歌」の「雅」と異なる、庶民的な「俗」
が「俳」となることへの着目は、句の解釈の際に、学習者の思考を促すもう一つの問いかけとなるだろう。このよ
うな俳諧を理解するための最も本質的な事柄が教科書教材で捨象されている、というよりも、文学史的事項の(関
連が見えざらばらな) 膨大な情報の中で、基本的な「和歌とは何か」「俳諧とは何か」を考える問題が埋没し、
却って把握されにくくなっているのではないだろうか。

「近世俳諧」教材の例は決して新しくはなく、近代以降の中等学校以上の国語教科書に比較的古くからみられるものである。明治二十年代の芳賀矢一・立花銃三郎編、上田萬年閱『国文学読本』（富山房、明23・4）の例では、各作者別に作品本文が配置され、「芭蕉」（二二六頁）に「俳句廿四首 附録」として、松尾芭蕉の文学史的解説と発句24句を掲載し、後半の「附録」にその他、荒木田守武以下の俳諧連歌及び俳諧の発句13句が収められている。前掲のBに相当する性質の教材である。

その巻頭「例言」の「六」に「教授若くは自修の際、多少の参考補助たらん事を希ひたれば」とある通り、中等教育以上の教科書及び読本とも見られる書だが、「例言」には、「俳句」や「韻文」に関する以下の文章がある。¹⁰（傍線は引用者による）

・三。此書散文のみならず併せて韻文をも収めたるは、両者はともに相待ちて始めて一國の文学をなすものなればなり。

・四。戯曲、小説、俳句、狂歌の如きは従来我文学上殊に賤め来りたるものなれども、是亦一種の光彩を文園に放つものなるを以て、此書には其模範として最も高雅なるもの若干篇を選出したリ。

・八。此書古代に略にして近代に詳なるは、普通文の模範とすべきもの彼に在らずして此に在ればなり。徒に高尚なる古文を今日に通用せしめんとするが如きは編者が志にあらず。 （『国文学読本』「例言」）

筆者の「散文のみならず併せて韻文をも収めたる」という表現には、江戸時代以前からの雅文芸的な詩歌の尊重する伝統的価値観と、近代の国語教育観とが交錯する意識も窺われる。明治期当時の、言文一致体の進む過程の時期の国語教科書として、「普通文の模範」たる作品を選出するという教材の考え方が背景にあるとみられる。同時に、明治二十年代の編者の観点では、本来俗文芸的な「戯曲、小説、俳句、狂歌の如き」ものとは「従来我文学上殊に賤め来れたる」もので、伝統的な和歌や詩文の「雅文芸」の古典観の意識に基づく位置付けにあるといえる。「俳句」の「俳」が本来の「雅」ではないという考え方も、その意識によって支えられている。

そうした背景と比べて、二十一世紀の今日の国語教科書の、例えば前述の【例2】⑧⑨のように散文と韻文を分

ける単元構成では、西鶴や近松の「俗」文体の作品と秋成の読本の作品とが散文の枠の中で括られる。このような分け方によって、「俳諧と浮世草子」の単元の基にあつたはずの概念——「俳言」による文学」という古典的常識の意味合いは失われていくようであり、芭蕉の俳諧がその後辿つたある種の「古典化」と相俟つて、近代以前の古典文学観からの一層の隔たりも感じられる。

十九世紀的な教科書の教育観をやみくもに復古させる必要はないが、問題は、近代や近世以前の時代から続く「雅」「俗」の意識や日本古典文学の基本的理解が、今日の国語教育に生かされているのかに関わる。「俳句」観の変化や文学史観の推移と照らして、「俳諧」の言葉がどこから来て何をもたらすのかという意識をもつことは、古典文化の理解や古典学習の指導目標の設定にも寄与しうるのではないか。引き続き、文学史観の反映される古文教材例として、近世文学作品教材の意義を追求したい。

注

- (1) 拙稿「国語教材「白河の関」から『おくのほそ道』へ——作品研究史と古典指導の「関」の課題——」(『香椎潟』55、平21・12)
- (2) 拙稿「国語教材としての「丹波与作」——近代以降の近松作品テキストの影響と教材観——」(『文藝と思想』82、平30・2)
- (3) 堀切実他編『『おくのほそ道』と古典教育』(早稲田教育叢書6、学文社、平10・10)、堀切実・藤原マリ子「第一章 1 国語教科書における『おくのほそ道』」同II『『おくのほそ道』教育史——その指導法の変遷——」
- (4) 入江昌明「平成以降の中学国語教科書における俳句教材について(1)」「同(2)」「神戸女子短期大学『論攷』51、平18・3)。中学校用教材では、東京書籍の平成十八年度版『新編 新しい国語2』に中学二年生向けの「創作講座・句を付けて遊ぼう」があり、前句付・一茶句への脇の付句・芭蕉句に付ける連句遊びといった内容も構成されていた。
- (5) 光村『国語3』平成十九年版では、同教材の「俳句の可能性」に飯田龍太・野澤節子・大峯あきら・尾崎放哉・津沢マサ子の句の箇所を採録している。また「資料・学習を広げる」に「俳句十六句」として「近世の俳句」4句(嵐雪・蕪村・一茶・言水)と「近代以降の俳句」12句(碧梧桐・窓秋・兜太・子規・山頭火・桂信子・秋櫻子・蛇笏・佐弓・虚子・汀女・楸郵)を掲載する。

(6) 注(4)の調査報告の指摘では、学校図書『中学校国語3』(平成九年度版)「2 環境と人間——俳句を味わう」も蕪村・一茶の発句と子規・汀女・放哉の句が並ぶ。

(7) 平成期の発句教材例として、【例1】～【例6】の本文掲載の近世俳諧の発句を、時代順の作者ごとに以下に掲げる。(表記は教科書本文例に従う。算用数字は、本論で扱った教科書群における概ねの例数)

(松永貞徳) 霞さへまだらに立つやとらの年

雪月花一度に見する卯木かな 2

花よりも団子やありて帰る雁

(北村季吟) 年の内へふみこむ春の日足かな 2

(西山宗因) 海は少し遠きも花の木の間かな 2

世の中や蝶々とまれかくもあれ

(小西米山) 行水も日まぜになりぬ虫のこゑ

(池西言水) 凧の果てはありけり海の音 2

(井原西鶴) 浮き世の月見過ぐしにけり末二年 2

大晦日定めなき世の定めかな

(松尾芭蕉) 秋深き隣は何をする人ぞ

あけぼのや白魚しろきこと一寸 2

いざさらば雪見にころぶ所まで

うきわれをさびしがらせよ閑古鳥 2

鶯や餅に糞する縁の先

海暮れて鴨のこゑほのかに白し 9

梅が香にのつと日の出る山路かな 5

おもしろうてやがてかなしき鶉舟かな 5

かさねとは八重撫子の名なるべし

鯉売りいかなる人を酔はすらん

枯れ枝に鳥のとまりけり秋の暮れ 3

象潟や雨に西施がねぶの花

菊の香や奈良には古き仏たち

この道や行く人なしに秋の暮れ 6

五月雨の降り残してや光堂

五月雨をあつめて早し最上川

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店 2

蝸壺やはかなき夢を夏の月 6

旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる 10

夏草や兵どもが夢の跡

奈良七重七堂伽藍八重桜 2

芭蕉野分して鹽に雨を聞く夜かな 6

初しぐれ猿も小蓑を欲しげなり

花の雲鐘は上野か浅草か

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

一家に遊女も寝たり秋と月

病雁の夜寒に落ちて旅寝かな 6

冬の日や馬上に氷る影法師

古池や蛙飛びこむ水の音

ほろほろと山吹散るか滝の音 3

行く春や鳥啼き魚の目は涙

山路来て何やらゆかしすみれ草 4

世の人の見付けぬ花や軒の栗

若葉して御目のしづくぬぐはばや 4

(河合曾良)

松島や鶴に身をかれほととぎす

(山口素堂)

目には青葉山ほととぎす初鰹

(上島鬼貫)

ひうひうと風は空ゆく冬ぼたん

(榎本其角)

越後屋にきぬさく音や衣更 2

(服部嵐雪)

梅一輪一輪ほどのあたたかさ 5

(向井去来)

応々といへどたたくや雪の門 3

(森川許六)

こがらしの地にも落とさぬしぐれかな

(内藤丈草)

卯の花に葦毛の馬の夜明けかな 2

(野沢凡兆)

大原や蝶の出で舞ふ臘月 2

(千代女)

上行くと下来る雲や秋の天 2

(炭太祇)

市中は物のにほひや夏の月

(与謝蕪村)

朝顔に釣瓶とられてもらひ水 2

夕顔や女子の肌の見ゆる時 2

盗人に鐘撞く寺や冬木立

初恋や灯籠に寄する顔と顔 2

風きのふの空のありどころ 2

稲妻や浪もて結へる秋津島

愁ひつつ岡にのぼれば花いばら 9

御手討の夫婦なりしを更衣

斧入れて香におどろくや冬木立 4

五月雨や大河を前に家二軒 7

しら梅に明るる夜ばかりとなりにけり 4

白梅や墨芳しき鴻臚館 2

蕭条として石に日の入る枯れ野かな 3

月天心貧しき町を通りけり 9

鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな 9

夏河を超すうれしさよ手に草履

菜の花や月は東に日は西に

春雨や小磯の小貝ぬるるほど

春の海終日のたりのたりかな 3

びいどろの魚おどろきぬ今朝の秋 3

方百里雨雲寄せぬ牡丹かな

牡丹散つて打ちかさなりぬ二三片 5

ほととぎす平安城を筋かひに

行く春やおもたき琵琶の抱きごころ 5

ゆく春や逡巡として遅桜

うぐひすやものまぎれに夕鳴きす

青海苔や石の窪みの忘れ潮 2

絵草紙に鎮おく店や春の風

冬木立月骨髄に入る夜かな

人恋し灯ともしごろをさくら散る

(加舎白雄)

月や霰その夜の更けて川千鳥 2

(上田秋成)

有明や浅間の雲が膳をはふ 7

(小林一茶)

蟻の道雲の峰よりつづきけん 4

仰のけに落ちて鳴きけり秋のせみ 3

うげんとして山を見る蛙かな 4

古郷やよるもさはるも茨の花 3

心から信濃の雪に降られけり 6

これがまあつひの栖か雪五尺 7

さびしさに飯を食ふなり秋の風 2

しづかさや湖水の底の雲の峰 2

涼風の曲がりくねつて来たりけり 6

涼風や力いづばいきりぎりす

づぶ濡れの大名を見る炬燵かな 2

露の世は露の世ながらさりながら 3

名月を取つてくれろと泣く子かな 3

目出度さも中位なりおらが春 3

瘦蛙まけるな一茶是にあり 2

雪とけて村いづばいの子どもかな 6

わんぱくや縛られながら呼ぶ螢 2

(8) 指導者用の解説書の例では【例2】⑦の解説書『古典1 改訂版 指導資料I「古文編」』（大修館書店、平23・4改訂版第4刷）

に、「蝟壺や」句の「ユーモアとペーソスをもつて描かれた情景」（P.358）等のポイントの指摘、「参考」の「貞門俳諧」の「言葉のおもしろみ」や「談林俳諧」の「奇抜な趣向や謡曲調」といった解説がみられる。説明上「俳言」という用語そのものは用いられていないが、その性質との関連が考えられる。

(9) 右文書院『古典1』（平14・4・1、平6・3・15文部科学省検定済）古文編「五和歌・歌謡・俳諧」の「俳諧（発句）」は、「月に柄をさしたらばよき団扇かな」（山崎宗鑑）「落花枝にかへると見れば胡蝶かな」（荒木田守武）から貞徳の句以下16句を各人一句ずつ掲載する点において、この「国文学読本」の教材構成に近い。

(10) 国立国会図書館デジタルコレクション（23-84 DOI: 10.11501/868097）による。

※なお、本稿は平成二十八〜三十年度科学研究費・基盤研究（C）「国語教科書の日本近世作品教材の研究——解釈受容と教育の展開の分析」（研究代表者 大久保順子、課題番号16K02412）の研究成果の報告である。

